

《論文》

若者の就業と結婚に関する意識

—高校時代から高卒5年目への変化—¹

元 治 恵 子

1. はじめに

厚生労働省及び文部科学省による調査『平成23年3月大学等卒業予定者の就職内定状況』（2010年10月1日現在2010年11月16日発表）において、大学生の就職内定率は57.6%と、前年同期を4.9ポイント下回り、1996年度の調査開始以来過去最低の水準となった。男女別にみると、男子は59.5%（前年同期を3.8ポイント下回る）、女子は55.3%（同6.3ポイント）であった。また、完全失業率も、若年層で特に高い傾向が続いている。このような数値（統計データ）に象徴されるように、近年の経済状況の低迷をうけ、若者をめぐる雇用環境は日々悪化していくかのように見える。新規学卒労働市場が縮小するなか、女性のみならず、男性においても非正規雇用労働者が増加しており、経済的に不安定な層が拡大している。若年期の一時期に非正規雇用労働者として働き、その間経済的に不安定であったとしても、その後何らかの形で経済的にも問題なく安定的な生活が送れるということであれば、問題はそう大きくないかもしれない。しかし、仕事に関わりはじめる時期に非正規就労についた場合、その後の仕事人生に悪影響が残る、すなわち、キャリアのはじめの不安定な雇用が長期化し、その後のキャリア形成に障害となり、格差が拡大するという（白波瀬 2010）。このような経済的な問題は、個人の問題にとどまらない。現代日本の「少子化」の問

題の背景には、「未婚化、晩婚化」の問題があり、さらにこの背景には、若年未婚層、特に若年男性の経済力の低下もあることが指摘されている（山田編著 2010）。このように、若者をめぐる就業状況の問題は、家族形成の問題と密接にかかわっている。

そこで、本稿では、若年層の就業と結婚をめぐる意識、具体的には、キャリアデザイン、結婚アスピレーション、ライフデザインについて検討する。その際、パネル調査データのメリットを活かし、高校3年生の時点と高校卒業後5年目の時点での変化に焦点をあて、2時点で変化が見られるのか、あるいは、見られないのか、その実態について明らかにしていく。

2. 先行研究の検討と分析課題

2. 1. キャリアデザインに関連する先行研究

キャリアデザインに関連する研究としては、女性の進路分化²、職業アスピレーション、キャリアアスピレーションなどの研究があげられる（元治 2007, 2008）。それぞれの分野でさまざまな知見が得られているが³、一時点の調査結果に基づくものが多く、意識の変化を扱っているものは、ほとんどない。変化に焦点を当てたものとしては、三輪（2007）が本稿と同じデータを用いて、高校3年生、高卒1年目、高卒2年目の3時点でのキャリアデザインの変化およびその規定因を分析している。分析の結果、多くの者はどの時点においても「正社員」とし

て働くことを望んでいること、高校在学時から卒業後2年目までの分布はほとんど変わらないこと、意識の性差は年齢が上がると拡大することなどが明らかになっている。

2. 2. 結婚アスピレーションに関連する先行研究

未婚化（晩婚化）・少子化を背景に、近年、若者の結婚や出産に関する調査・研究が行われている。結婚意思をもつ未婚者は少なくないものの、結婚を先延しする傾向が若干増加していること、男性では就業状況によって結婚への意欲に違いが見られることが明らかになっている（国立社会保障・人口問題研究所 2006）。また、若い女性の保守化が指摘され（元治・片瀬 2008, 松田 2005, 中井 2000, 谷田川 2010 など）⁴、結婚願望は決して弱くないという結果も示されている。

2. 3. ライフデザインに関連する先行研究

若い女性を対象としたライフデザインに関するさまざまな研究が行われてきている。母親の属性（就業形態、学歴など）や在籍している（あるいは卒業した）教育機関の影響などが指摘されている。また、性別役割意識との関連についても多くの研究がなされ、性別役割意識に賛成な者ほど家庭志向、否定的な者ほどキャリア志向という関連が見出されている（元治・片瀬 2008, 中井 2000 など）。長尾（2008）では、本稿と同じパネル調査を用いて検討がなされているが、女性では高卒3年目で家庭志向に傾く傾向が見られ、これは漸進的に起こっているという。また、学歴や母親の就業状況の影響を受けていることも明らかになっている。

2. 4. 分析課題

以上の研究では、一時点の調査データや変化

や時点間の比較を行うという観点からサンプルの異なる複数時点での調査データを扱ったものが多く、パネル調査データを用いて同一個人の変化を中心に研究を進めたものは少ない。未成年である高校3年生時点から成年後の高卒5年目時点では、多くの者が「学校から職業」への移行を経験している。青年期から成人期への移行期は、その後の人生を左右するようさまざまな選択（たとえばどのような職業に就くかなど）をする重要な時期である。その時期の個人の意識の変化を連続して追うことは意義のあることである（長尾 2008）。そこで、本稿では、パネル調査データを用いて、高校3年生時点と高校卒業後5年目時点の2時点でのキャリアデザイン、結婚アスピレーション、ライフデザインの変化に焦点をあて、変化が見られるのか、あるいは、見られないのかについて明らかにすることを目指す。なお、分析においては、データ数の制約から有意性検定などによる一般化をすることに問題がある場合もある。よって、本稿は、今後の仮説構築や新たな調査のための探索的データ解析（Bohrnstedt and Knoke 1988, 前田 2010）として位置付け、記述的な分析を中心に検討していきたい⁵。

3. データの概要

3. 1. データ

分析には、東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトが実施している「高校生パネル調査」のうち、高校3年生を対象とし、2004年1月～3月に実施した『高校生の生活と進路に関するアンケート（第1ウエーブ：以下「高校生調査」⁶）』と2008年10月～2009年1月にかけて高卒者を対象に実施した『第4回追跡調査（第5ウエーブ：以下「高卒5年目調査」⁷）』のデータを用いる。分析対象は、『第4回追跡調査』に回答した528人（男性209人、女性319人）で

ある。

3. 2. 変数

本稿では、キャリアデザイン⁸、結婚アスペレション⁹、女性のライフデザイン¹⁰についての質問に対する回答を用いる。また、個人の属性を表す変数として、性別、学歴¹¹、現在の地位¹²を用いる。

4. 分析結果

4. 1. キャリアデザインの変化

まず、30歳時点でのキャリアデザインの変化について見ると（図1）、男女では分布に大きな違いが見られる。男性の場合、高校3年生時点で「正社員」を希望していた者のうち94.0%（男性全体の86.4%）と多数が、高卒5年目においても「正社員」を希望しており、他のカテゴリーへと変化した者は少数である。一方、女性の場合は、きわめて多様な変化が見られる。高校3年生時点で「正社員」を希望していた者について見ると、高卒5年目にも「正社員」を希望している変化していない者は65.8%（女性全体の49.5%）であり、11.1%が「非正社員」、14.7%が「専業主婦」へと変化している。一方で、

「非正社員→正社員」、「専業主婦→正社員」、「専業主婦→非正社員」などの就労方向へ変化する者も少なからずいる。しかし、全体としてみれば、女性の場合は、年齢進行とともに就労意欲が増大する者はそう多くはなく、減少する者の方が多い。これは、後述する女性のキャリアデザインについての問いに対する回答において高校3年時点で「継続就業」が良いと答えた者のうち、高卒5年目時点でも良いと答えた者は約半数にとどまり、3割強は「中断再就職」へと変化していることも非常に整合的である（4. 3節参照）。

女性の場合は、きわめて多様な変化が見られるが、このような変化は学歴や現在の地位によって違いが見られるのだろうか。ここでは、高校3年生時点で「正社員」を希望していた者のみに注目し、高卒5年目にどのように変化しているのか、あるいは変化していないのかを見ていこう。

学歴別にみると（図2）、男女ともに「大学以上」の方が、2時点において変化していない者、すなわち「正社員」を一貫して希望している者が多い。しかし、一見してわかるように、男女では変化の様子は違った様相を見せる。男

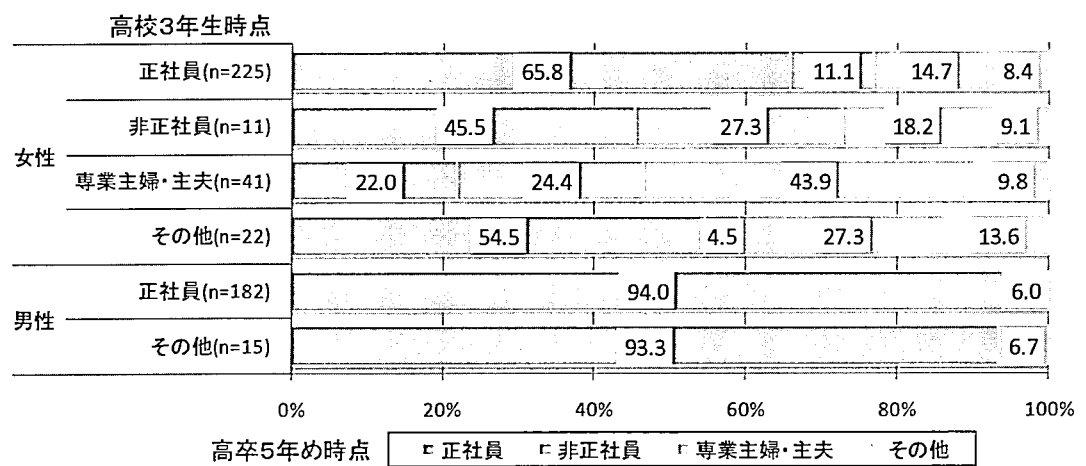


図1 キャリアデザインの変化（男：df=2, p=.964 女：df=9, p=.000）

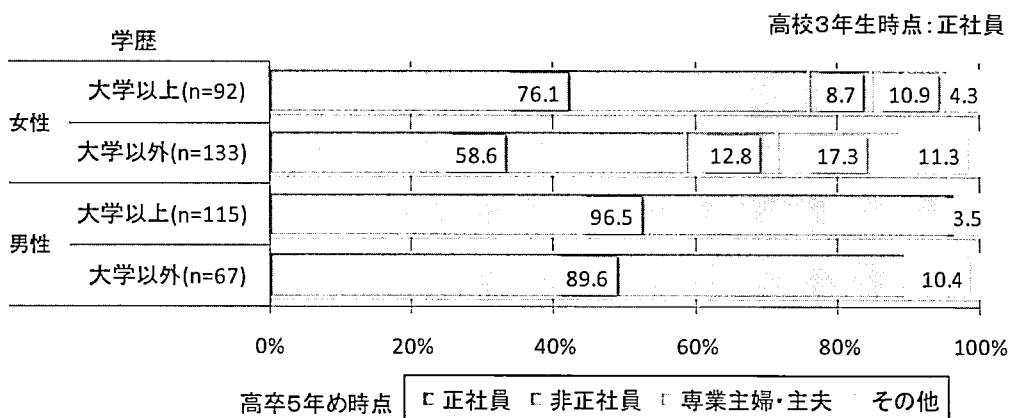


図2 学歴別高校3年生時点で「正社員」を希望していた者の変化

性の場合、「大学以外」の者の方が「正社員」を一貫して希望している者が少ないと言ってもほぼ9割近くに上っており、「大学以上」の96.5%と比べても大きな違いは見られない。一方女性の場合は、「大学以上」でも4分の1、「大学以外」では4割の者に何らかの変更が見られる。「非正社員」希望へ変わった者は、順に8.7%、12.8%、「専業主婦」に変わった者は、順に10.9

%, 17.3%であり、30歳時点における就労意欲が低下している傾向が見られる。以上のことから、女性の場合は、年齢が変化するとともに、将来の時点での就労意欲に減退傾向が見られ、その意欲は、低学歴ほど影響を受けている様子が見えてくる。

次に現在の地位別にみると(図3)、男性では、現在の地位によらず、「正社員」を一貫して希

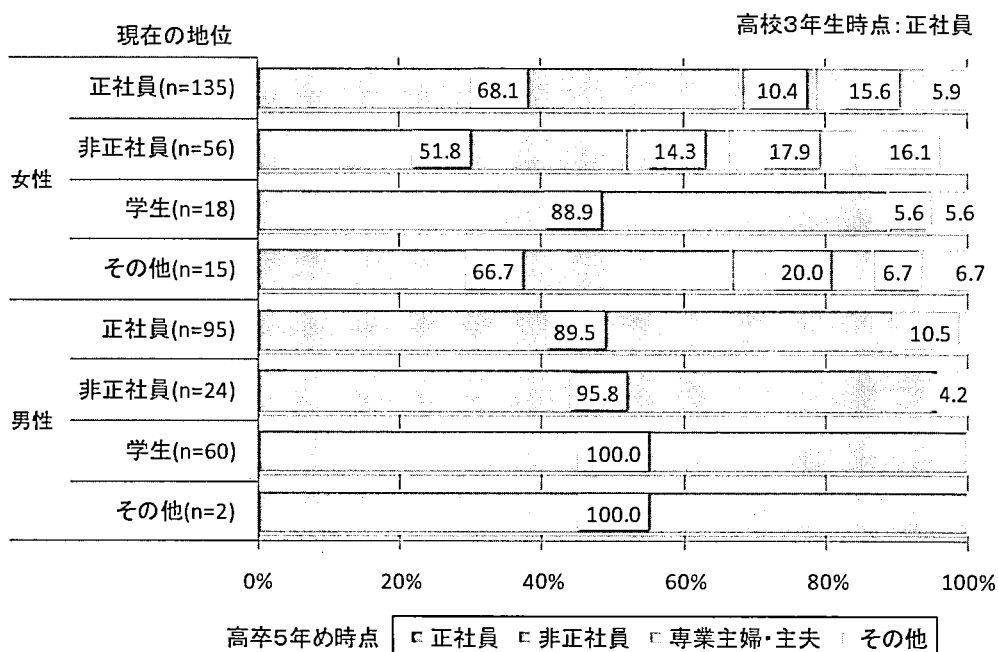


図3 地位別高校3年生時点で「正社員」を希望していた者のキャリアデザインの変化

望している者が多い。分析対象となっている「非正社員」の人数が少ないので、解釈には留保が必要だが、「正社員」よりも「非正社員」の方が「正社員」を一貫して希望している者が多い。これは、現在「正社員」ではないがゆえに30歳時点では「正社員」になっていたという強い願望のあらわれかもしれない。

しかし、女性では「正社員」希望で一貫している者は、「正社員」のうち68.1%、「非正社員」では51.8%と20ポイント弱の開きがあり、「正社員」で多い傾向が見られる。逆に、「正社員」希望から「非正社員」、「専業主婦」へと変化した者は、「非正社員」の方が多い。現在どのような働き方をしているのかによって将来のキャリアデザインが影響を受ける可能性が示唆される。

4. 2. 結婚に関する意識の変化

次に、結婚アスピレーションについてそれぞれの調査時点での全体的な傾向を見てみよう。図には示さないが、高校3年生時点では、男性の93.0%、女性の82.6%が結婚することを希望しており、男性の方が結婚への意欲が高い傾向が見られる。しかし、高卒5年目になると、男性では69.0%と大幅な減少傾向が見られる一

方、女性では82.6%と若干の減少に留まり、女性の結婚アスピレーションが男性に比べ、10ポイント強高い傾向が見られ、男女で逆転現象が起きている。

2時点での結婚アスピレーションの変化についてみれば（図4）、高校3年生時点で結婚を希望している者のうち男性では70.9%（男性全体の66.0%）、女性では86.5%（女性全体の75.6%）が、高卒5年目においても結婚を希望している。一方高校3年生時点で結婚を希望していない者では、男性53.8%（同3.7%）、女性50.0%（同6.3%）と約半数が、高卒5年目においても結婚を希望していない。

一方、変化した者について見ると、「結婚希望」から「結婚非希望」へ変化した者は、男性29.1%（同27.1%）、女性13.5%（同11.8%）、「結婚非希望」から「結婚希望」へ変化した者は、男性46.2%（同3.2%）、女性50.0%（同6.3%）であった。全体からみれば、男女ともに結婚を希望しなくなった者の方が多い傾向が見られる。結婚意思を持つ未婚者は多いものの、結婚を先延しする傾向が若干増加しているという調査結果も出ているが（国立社会保障・人口問題研究所 2006）、本稿の分析対象者においても結婚への意欲がなくなったというよりも、年齢を経

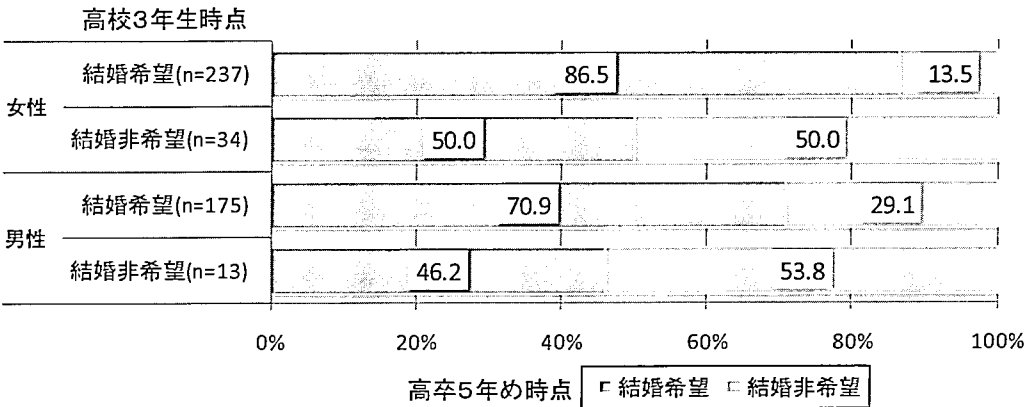


図4 結婚アスピレーションの変化

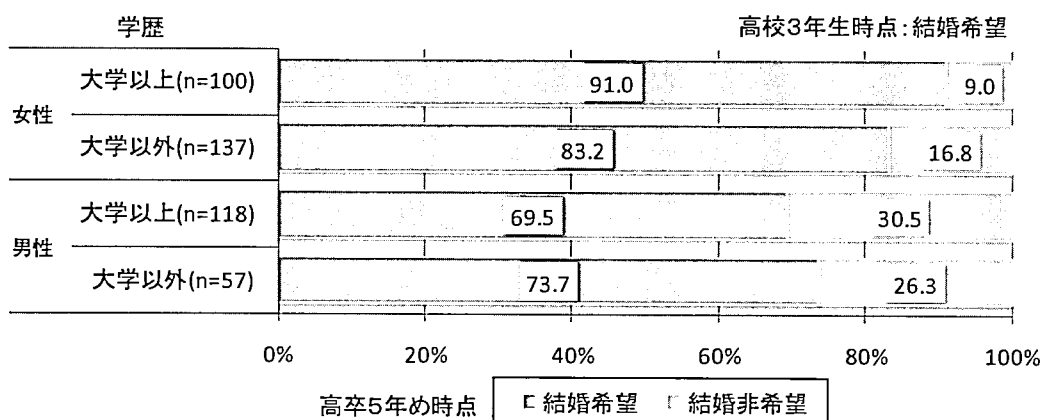


図5 学歴別高校3年生時点で結婚を希望していた者の結婚アスピレーションの変化

ることによって遠い先のこと（夢）から近い未来の現実のものとして意識し始めることにより、先延ばしの傾向が表れたものと推測される。

結婚アスピレーションに関して男女とも類似する変化傾向を示していたが、学歴や現在の地位によって意識の変化に違いが見られるのだろうか。ここでは、高校3年生時点で結婚を希望していた者のみに注目し、高卒5年目にどのよ

うに変化しているのか、あるいは変化していないのかを見ていこう。

学歴別に見ると（図5）、男女では逆の傾向が見られる。男性の場合にはそれほど大きな差ではないものの、「大学以上」の者よりも「大学以外」の者の方が、「結婚希望」で変化のない者が多い。一方女性の場合にはその逆で「大学以上」の者で、「結婚希望」で変化のない者

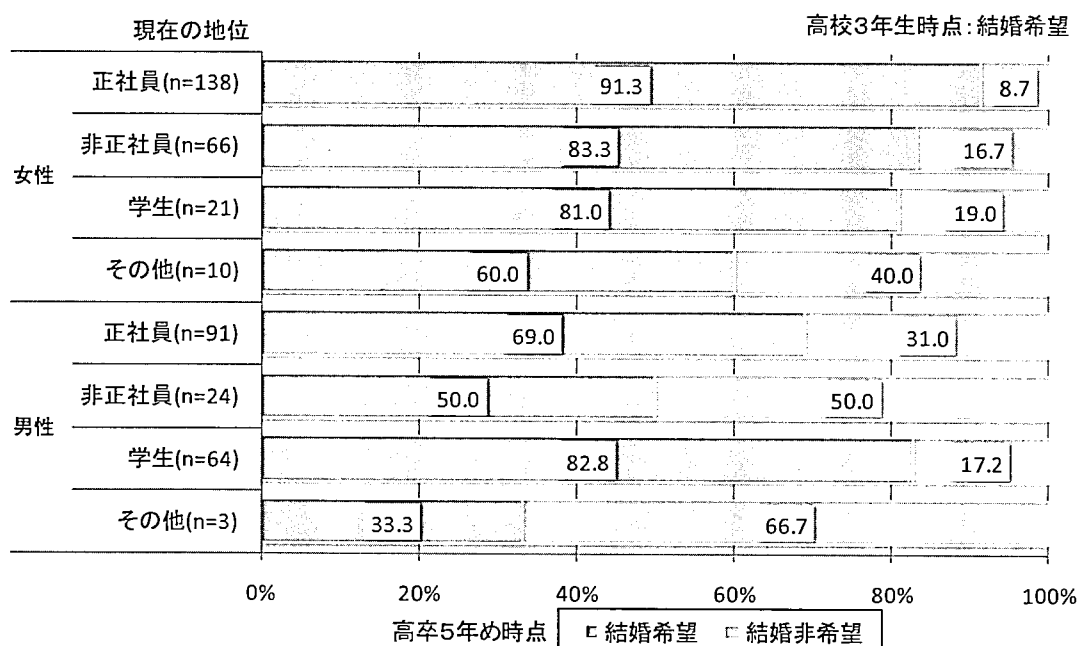


図6 地位別高校3年生時点で結婚を希望していた者の結婚アスピレーションの変化

が多い。

次に現在の地位別に結婚アスピレーションの変化を見てみると（図6）、男女とも「正社員」に比べ「非正社員」は、高校3年生時点で結婚を希望しているものの、高卒5年目で非希望へ変化した者が多い。就業状況、およびそれによる経済状況が、結婚への意欲に影響を及ぼしている可能性が示唆される。また、学生の場合には、男女とも8割強が「結婚希望」のままであるが、男性の場合には、「正社員」や「非正社員」など就業している者に比べ変化しない者が多いのに対し、女性の場合には、働いている者よりも少なく、性別によって異なる意味をもっている可能性が示唆される。

4. 3. 女性のライフデザインに関する意識の変化

女性のライフデザインについての2時点の変化を見てみよう（図7）。注10にもあるように、男性には配偶者になる人への希望、女性には自

分自身の希望をたずねている。興味深い点は、高校3年生時点で「継続」や「中断」としていた者では、男女で変化/無変化のパターンが類似していることである。具体的には、「継続」で変化のない者は半数強、「中断」で変化のない者は6割程度、「継続」から「中断」へと変化した者は3割強、そして、「中断」から「継続」へと変化した者は3割弱であり、変化のない者の方が多数を占めている。その一方で、高校3年生時点で「専業主婦」や「その他」としていた者では、変化/無変化のパターンに違いがみられる。「専業主婦」について見れば、両時点で変化していない者は、女性では3割弱なのに対し、男性では2割弱にとどまっている。また、女性の場合は変化した者の多くは、「中断」希望へと変化しており、「専業主婦」になることは、現実的に考えれば、難しいと判断した結果と言えるのかもしれない。このことは男性にも同様のことが言えそうで、「専業主婦→継続」25.8%、「専業主婦→中断」35.5%となっており、妻を

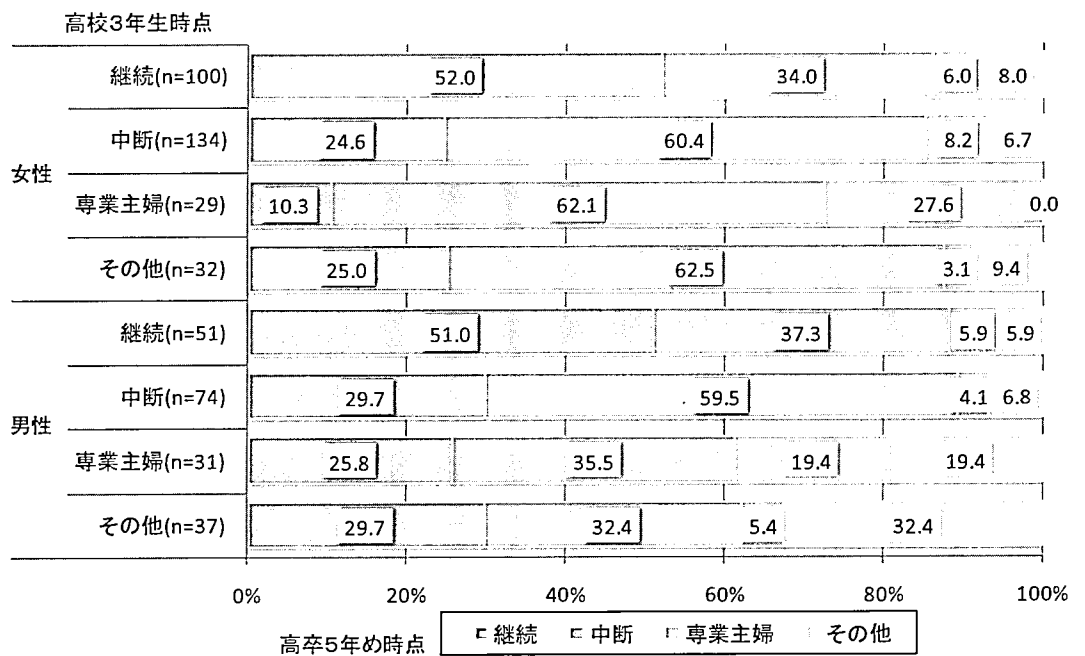


図7 女性のライフデザインに関する意識の変化（男：df=9, p=.000 女：df=9, p=.000）

専業主婦として養っていくことは現実的には難しいと考えるようになった可能性が示唆される。

男性の場合、将来の結婚相手に希望するキャリアデザインということで、20歳を若干過ぎた時点ではかなり不確定な要素が多いだろう。それに対し、女性の場合は、ある程度の理想を含んだものとは言え自分自身のことであり、現実的に描く将来像として考えることができるだろう。そこで、以下では女性のみにも焦点をあて、学歴や現在の地位との関連を見ていくことにする。

まず、学歴別にライフデザインの変化を見ると（図8）、高校3年生時点で「中断」を希望していた者では、高卒5年目でも「中断」を希望している者が6割前後と多数を占め、「中断→継続」へと変化した者が4分の1程度いるなど、両者に似たような分布が見られる。それに対し、「継続」を希望していた者では違った傾向が見られる。高卒5年目でも引き続き「継続」を希望している者が、「大学以上」では66.7%

であるのに対し、「大学以外」では41.4%と25ポイント強の開きがあり、「大学以上」の者で継続一貫傾向が強い。その一方で、「継続→中断」と変化した者は「大学以上」で26.2%、「大学以外」では39.7%と、「大学以外」の方が10ポイントほど多く、就労意欲が低減する者が多い傾向が見られる。

続いて、「正社員」と「非正社員」の者について地位別にライフデザインの変化を見ると（図9）、高校3年生時点で「継続」、「中断」を希望していて変化のない者、すなわち「継続→継続」（「正社員」55.9%、「非正社員」45.8%）や「中断→中断」（順に64.5%、48.5%）は、「正社員」の方が多い傾向が見られる。「中断→継続」へと変化した者は両者とも4分の1程度で違いは見られない。しかし、「継続→中断」へと変化した者は、「正社員」の場合27.1%であるのに対し、「非正社員」の場合には41.7%と10ポイント以上の開きがある。現在の地位が不安定であることにより、仕事を継続していくという将来像を描きにくい状況におかれていると考え

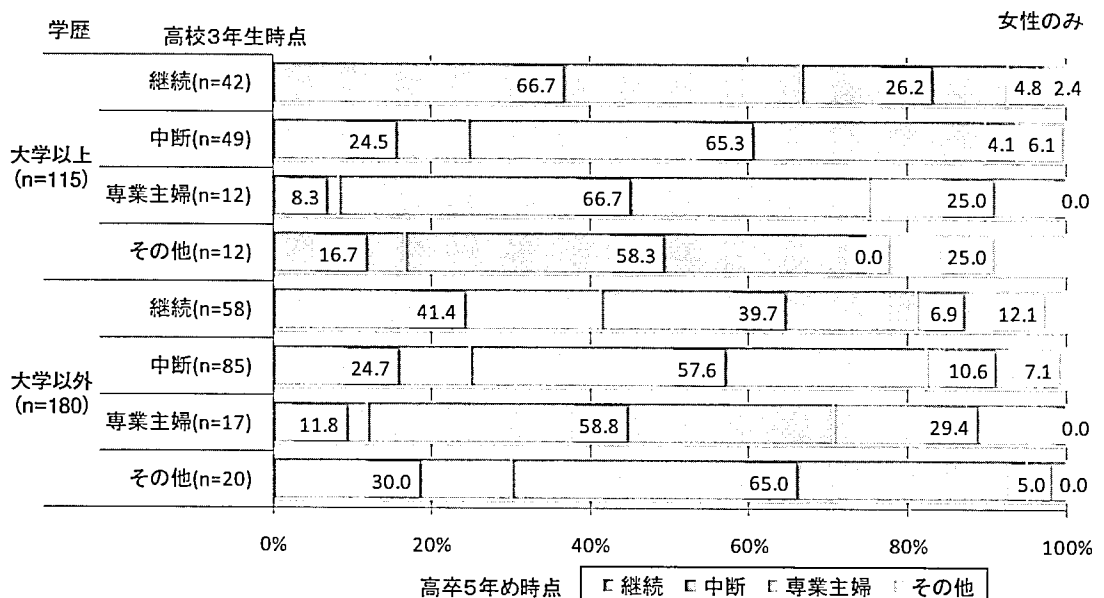


図8 学歴別女性のライフデザインに関する意識の変化

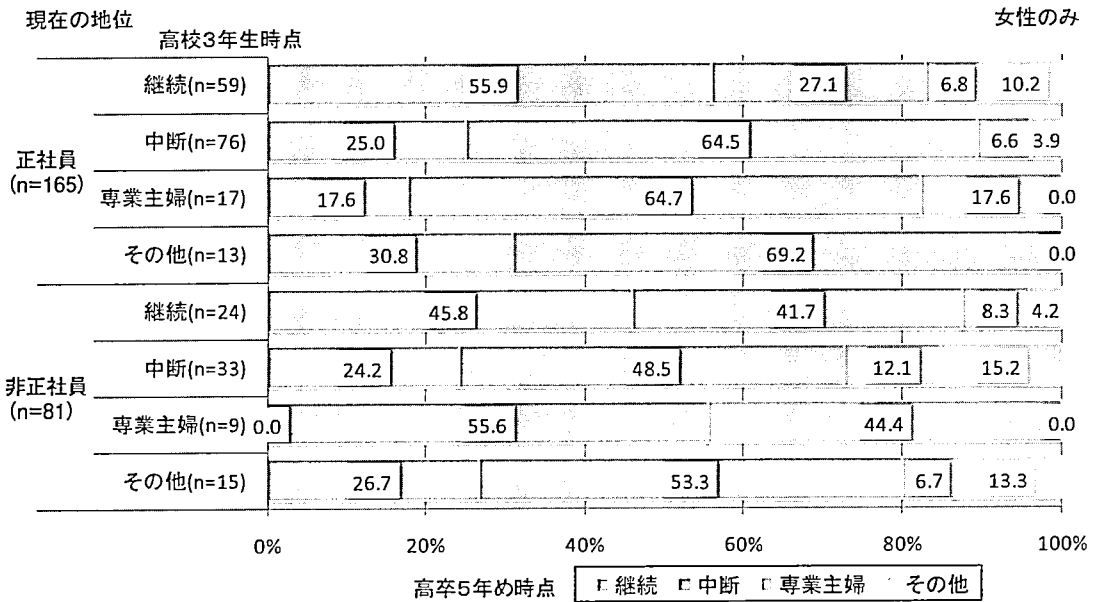


図9 地位別（「正社員」、「非正社員」のみ）女性のライフデザインに関する意識の変化

られる（「非正社員」の場合、ケース数が少ないので、結果の解釈には一定の留保が必要ではあるが）。

4. 4. ライフデザインとキャリアデザインの関係

現代社会においても女性が働く（働き続ける）ことに関して、男性に比べさまざまな困難が見られる。どのような人生を送りたいか、そして、その人生において「働く」ということをどのよ

うに位置づけるかということは密接に関連していると考えられる。そこで、最後に各時点におけるライフデザインとキャリアデザインの関連を検討する¹³。図10が高校3年生時点、図11が高卒5年目時点での関連を示したものである。両時点を比較するとライフデザインで「継続」と「専業主婦」を希望している者では、極めて類似した傾向を示しているのに対し、「中断」を希望している者では、キャリアデザインの分布が大きく異なっていることが一見してわか

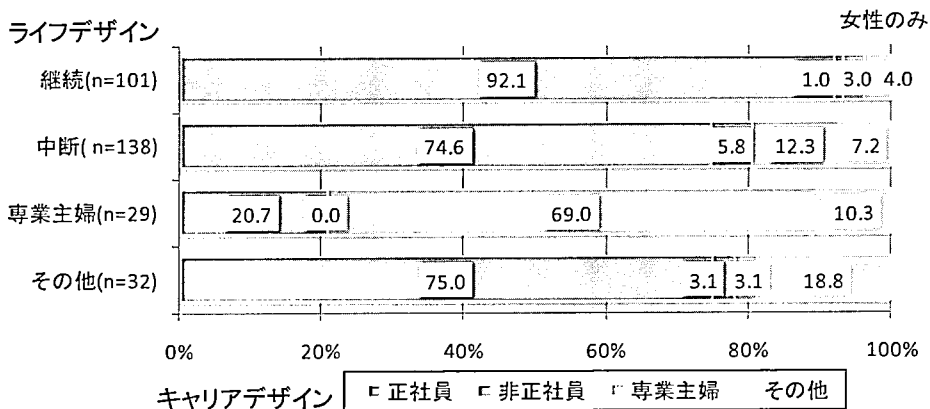


図10 高校3年生時点のライフデザインとキャリアデザイン

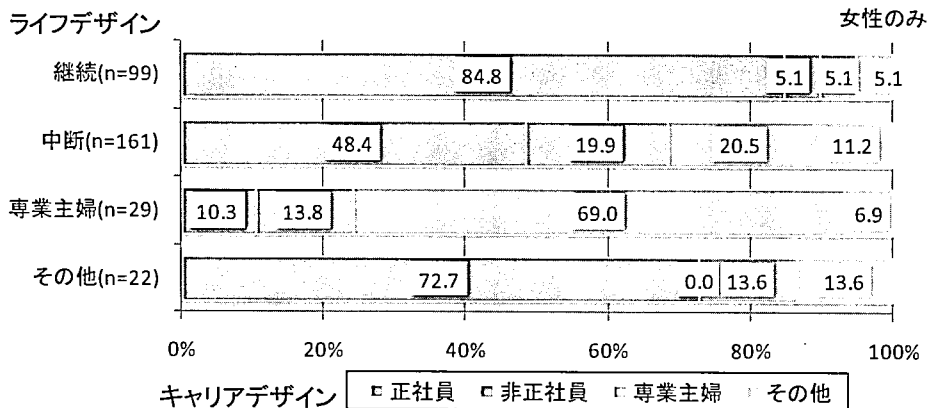


図11 高卒5年目時点のライフデザインとキャリアデザイン

る。高校3年生時点では、「正社員」を希望する者が74.6%と多数を占め、「非正社員」が5.8%、「専業主婦」が12.3%であるのに対し、高卒5年目時点では「正社員」を希望する者が最も多いのは同様だが、48.4%に留まり、「非正社員」が19.9%、「専業主婦」が20.5%となっている。また、全般的にキャリアデザインの分布を改めて確認すると、どのライフデザインを描いていても、高校3年時点にくらべ高卒5年目では、「正社員」を希望する者が減少し、「非正社員」、「専業主婦」を希望する者が増加している。この違い（変化）はどのような要因によるもののだろうか。キャリアデザインは30歳時点での希望をたずねている。年齢が30歳に近付いたこと、実際に社会に出て仕事を経験したことなどが影響を与え、理想ではなく、より現実的に予想できるキャリアデザインと解釈できるのかもしれない。その変化は、就労意欲が増加する方向ではなく、減少する方向である。女性の場合、働くことをめぐるさまざまな困難を実際に経験する前に、その時々で生じるであろう葛藤やストレスと折り合いをつけるために、それらが少ない方へおりてしまっている可能性が示唆される。

5. 考察

本稿では、パネル調査データを用いて、キャリアデザイン、結婚アスピレーション、ライフデザインについて、高校3年生時点と高卒5年目時点での変化に焦点をあて、分析を行ってきた。分析の結果、以下の点が明らかになった。

第1に、キャリアデザインの変化は男女で大きく異なる様相を示していた。男性の場合、変化はあまり見られず、学歴や現在の地位の影響も見られなかった。しかし、女性の場合、年齢が変化するとともに、将来の時点での就労意欲に減退傾向が見られ、それは、低学歴、現在の地位が不安定な者ほど影響を受けていた。

第2に、結婚アスピレーションの変化では、男女ともに結婚を希望しなくなった者の方が多く、とくに、現在の地位が不安定な者ほど、結婚への意欲が減退している傾向が見られた。

第3に、ライフデザインの変化では、男女で変化／無変化のパターンが類似している傾向も見られ、理想から現実的に実現しそうな予想へと変化している可能性が示唆された。女性の場合、高学歴、現在の地位が安定していることによって、2時点において就業継続希望を維持しやすい傾向が見られた。

第4に、女性のライフデザインとキャリアデザインの関連の変化は、どのライフデザインを描いていても、就労意欲が減退する傾向が見られ、働くことをめぐるさまざまな困難を実際に経験する前に、あきらめている可能性が示唆された。

以上のように、全体的には、男性の場合、高卒5年目では大きな変化は見られなかったが、女性の場合、高卒5年目でも既にさまざまな変化が見られた。年齢を重ね、職業上のキャリアを積み、家族（配偶者や子ども）を持った時に、

どのような変化が見られるのか、あるいは、変化は見られないのか、非常に興味深いところである。個人のさまざまな意識の変化や形成過程はパネル調査によって個人を追跡していく方法でしか明らかにならない。調査の継続が望まれる。

また、本稿では、調査データのサンプルの大きさの制約により、意識の変化の規定要因など詳細な分析ができなかった。パネル調査データを分析するため手法を用いるなどしてある程度可能な分析も考えられる。今後の課題としたい。

[謝辞]

本研究は科学研究費補助金基盤研究（S）（18103003, 22223005）、厚生労働科学研究費補助金政策科学推進事業（H16－政策－018）による研究成果の一部である。また、調査の実施にあたっては、東京大学社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。記して、深く感謝申し上げます。

[文献]

- Bohrnstedt, G. and Knoke, D., 1988, *Statistics for Social Data Analysis* (2nd ed.), Itasca, IL: F. E. Peacock Pub（海野道郎・中村隆監訳、『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社）。
- 元治恵子, 2007, 「高校生の描く将来像—30歳時のキャリアデザイン・ライフデザイン—」佐藤博樹編『厚生労働科学研究費補助金政策科学推進事業 若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究 平成16～18年度総合研究報告書 平成18年度総括研究報告書』70-88。
- , 2008, 『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ No.15 若年層のキャリアデザイ

ン・ライフデザインの変化—高校在学時から高卒3年目への変化—』。

- 元治恵子・片瀬一男, 2008, 「性別役割意識は変わったか—性差・世代差・世代間伝達—」片瀬一男・海野道郎編『＜失われた時代＞の高校生の意識』有斐閣, 119-142。
- 橋本摂子, 2009, 『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ No.29 未婚者層における結婚意識の変動と社会階層的要因：パネル・ロジットモデルによるアスペレーション分析』。
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2006, 『第13回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査』。
- 前田信彦, 2010, 『仕事と生活 労働社会の変容』ミネルヴァ書房。
- 松田茂樹, 2005, 「性別役割分業意識の変化—若年女性に見る保守化のきざし—」『Life Design Report』2005年9月号：16-27。
- 三輪哲, 2007, 「現代若年層におけるキャリア意識の変化 高校在学時から卒業2年後にかけてのパネルデータ分析」佐藤博樹編『厚生労働科学研究費補助金政策科学推進事業 若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証分析 平成16～18年度総合研究報告書 平成

- 18 年度総括研究報告書』186-201.
- 中井美樹, 2000, 「若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観」『立命館産業社会論集』36(3): 117-127.
- 長尾由希子, 2008, 『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ No.12 若年男女における性別役割分業意識の変化とその特徴: 高校生のパネル調査から』.
- 白波瀬佐和子, 2010, 『生き方の不平等—お互いさまの社会に向けて』岩波新書.
- 田中慶子, 2007, 「若年層の家族意識は「保守化」しているのか—JGSSとNFRJによる意識構造・規定要因の比較—」朝井友紀子・佐藤博樹・田中慶子・筒井淳也・中村真由美・永井暁子・水落正明・三輪哲編『家族形成に関する実証研究』SSJDA-37: 45-58.
- 山田昌弘編著, 2010, 『「婚活」現象の社会学—日本の配偶者選択のいま』東洋経済新報社.
- 谷田川ルミ, 2010, 「若年女性の家庭志向は強まっているのか?—女子学生のライフコース展望における10年間の変化—」『年報社会学論集』23: 200-211.

[注]

- 1 本項は2010年9月18日～19日に関西大学で開催された日本教育社会学会第62回大会において報告した「東大社研パネル調査(JLPS)に見る若年者の教育・就業・家族形成」(石田浩(東京大学)、佐藤香(東京大学)、大島真夫(東京大学)、三輪哲(東北大学)、茂木暁(東京大学)との共同発表)の原稿をもとに加筆・修正したものである。
- 2 「どのような進路分化を希望するか」という意識を扱う研究など。
- 3 詳しくは、元治(2008)を参照のこと。
- 4 一方で、結婚アスピレーションに限定した分

析ではないが、朝井ほか(2007)では、家族についてのさまざまな意識を分析し、若年女性が「必ずしも保守化しているわけではない」という結果もみられる。

- 5 図には、ケース数の少ない場合も、参考のため提示する。
- 6 「高校生調査」は、進学率と無業率において特徴の異なる4県を抽出し、4県から無作為抽出した全日制高校のうち調査協力の得られた101校の高校3年生男女を対象に実施された(回収数7,563人、回収率69.1%)。
- 7 追跡調査は、高校生調査の回答者のうち、追跡調査に協力することを了解した2,057人の卒業生に対して郵送で実施されている。第4回追跡調査(第5ウェーブ:「高卒5年目調査」)は、郵送とインターネットにより528名(回収率25.7%)から調査票を回収した。
- 8 「30歳ごろになったときに、どのような働き方をしたいと思いますか。」という質問に対し、「1. 正社員として働きたい」、「2. 自分で事業を起こしたい」、「3. 親の家業をつぎたい」、「4. 独立して一人で仕事をしたい」、「5. アルバイトやパートで働きたい」、「6. 専業主婦・主夫になりたい」、「7. その他」、「8. わからない」の回答選択肢が設定されている。2時点の回答それぞれについて、1～4を「正社員」、5を「非正社員」、6を「専業主婦」、それ以外を「その他」に分類した。本稿と同じ(使用した調査時点は異なるが)データを分析した三輪(2007)では、同じ変数を「キャリア意識」と称している。
- 9 高校生調査では、何歳ごろになったときにしたいかをたずねる形式(回答カテゴリーあり)で質問している。「そうするつもりはない」と回答した者を「結婚非希望」、それ以外の年齢カテゴリーに具体的に回答した者を「結婚希望」に分類した。高卒5年目調査では「結婚に

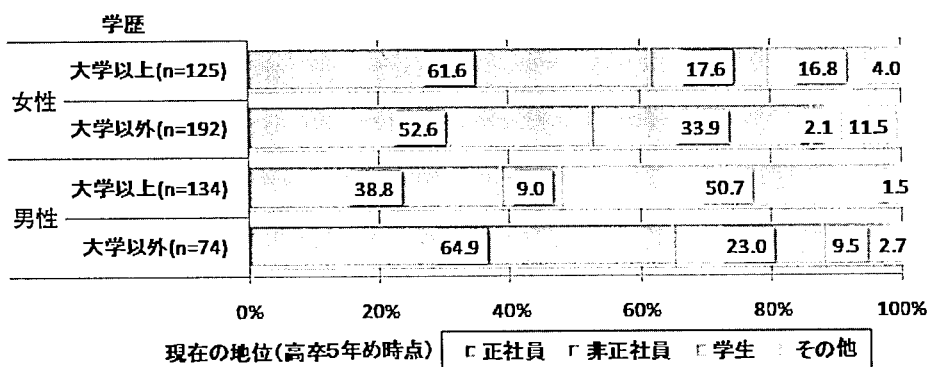
ついて、あなたはどのように考えていますか。」という質問に対し、「1. ぜひ結婚したい」、「2. できれば結婚したい」、「3. 結婚しなくてもよい」、「4. 結婚したくない」、「5. 結婚について考えていない」の回答選択肢が設定されている。1～2を「結婚希望」、3～5を「結婚非希望」に分類した。本稿の分析に使用するデータと同じ東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトの「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」のデータを分析した橋本(2009)では、同じ内容の質問項目を「結婚アスピレーション」や「結婚意識」と称している。

10 高校3年生調査では、「女性の仕事と結婚に関して、あなたはどのようなことがよいと思いますか。」という質問で、女性には自分自身、男性には配偶者になる人についての考えをきいている。回答選択肢は「1. 仕事をせず、結婚して家庭に入る」、「2. 結婚したら、もう仕事はしない」、「3. 子どもができたなら、もう仕事はしない」、「4. 子どもができたならいったん仕事をやめ、子どもに手がかからなくなったら仕事を始める」、「5. 結婚して子どもができて、仕事を続ける」、「6. 結婚しても子どもをつくらず、仕事を続ける」、「7. 結婚しないで仕事を続ける」、「8. その他」、「9. わからない」が設定されている。また、高卒5年目調査では「女性の家庭と仕事について、あなたの考えをうかがいます。」という若干異なる質問文が用

いられているが、回答選択肢は共通である。2時点の回答それぞれについて、1～3を「退職」、4を「中断」、5～7を「継続」、8～9を「その他」に分類した。多くの研究では、「ライフコース観」(中井 2000)、「ライフコース展望」(谷田川 2010)などと称されている、また、本稿と同じ(使用した調査時点は異なるが)データを分析した長尾(2008)では、同じ変数を「性別役割分業」と称している。本稿では、キャリアデザインとの対比から「ライフデザイン」を用いることにする。

- 11 「4年生大学以上に在籍あるいは卒業」であるのかないのかにより「大学以上」、「大学未満」に2つに分類した。在学中の者でも、適宜分類した。
- 12 過去5年間の状況をたずねた質問における調査時点についての回答(17のカテゴリ)について「正社員」、「非正社員」、「学生」、「その他」に分類した。また、学歴と現在の地位の関係は以下の付図のようになっている。
- 13 ここでは、同一個人がどのように変化／無変化したのかに注目するのではなく、分析対象全体として、それぞれの時点においてどのような関連があるのかを分析し、調査時点比較を行っている。

(げんじ けいこ、本学人間社会学科准教授)



付図 学歴と現在の地位